

学級経営における教師の役割

— 担任の変容の努力がどのように子どもに影響したか —

千歳小学校教諭 齋藤 ユキ子

<はじめに>

過去の経験から、学級経営について、ある程度自分なりの自信を持っていたが、ある時同僚の先生から、「いくらいいクラスだといっても、学級担任が変わったらだめになったというのでは、今まで学級担任が自分の枠に子どもをあてはめていただけであって、子ども自身がよくなったのではない。母性本能だけでは真の教育はできないよ。教師は母親ではないのだから。」といわれショックだった。他の先生方からは、よいクラスだと賞められていただけに、母性本能がなぜ悪いのか、どうしてだめなのか、すごく反発したり悩んだりした。それから、いったいどうすればよいのかということ、いろいろと本をあさって読んだ。しかしその結果やはりそれが私自身の欠点であることに気づいた。子どもには、それぞれ伸びようとしている芽があるのに、自分の狭い枠の中にきちんとはめてしまって満足していたことのおそろしさに気づいた。そして、自分の欠点(教師の欠点)をなおさない限り自分自身を変えていかない限り、子どもを変えることは不可能だという結論に達した。

それから、担任が変われば「絶対に子どもを変えることができる」という仮説のもとに、自分を変えるための小さな努力を続けてきたわけである。ここに、その実践の一端をのべてご指導をおおぎたい。

<自分を変えるために>

第1に、教えるという意識をなるべくおさえ、子どもを信じる努力をした。

第2に、心がまえとして、次のことを考えた。

- 低学年だからといって、親切すぎないように心がける。
- 多少うるさくとも、子どもがのびのびと活躍する場を多くする。
- 教師のおしつけでない、考えさせる指導についての発問の研究をする。
- 教師をたよらず子ども同志で話し合い助け合って伸びる芽を育てる。
- 子どもの性格や能力を考え、時には、つっぱねる指導も必要だという意識を持つ。

<学級経営目標について検討、次のことをとり上げた>

— 2年齋藤クラスの学級経営目標 —

ひとりひとりが生き生きと活動する学級づくり

- たがいに助け合い話し合える学級にする。
- 個々の能力をみつめて伸ばす。
- 基礎的なものをしっかり身につけさせる。
- ねばり強い子どもに育てる。

- 考えること、くふうすることに意欲をもやす子に育てる。
- 教室環境をくふうし明るく豊かな生活の場をみんなで作る。
- 家庭との連絡を密にし、学校と家庭との協力をはかる。

<子どもの成長をあらわす事例>

例(一) 子どもの着想がいっぱいの学習発表会

学習発表会の種目に社会科の工場見学(ストーブ工場)の発表を入れることになり、その指導を私が分担することになった。さてどこから始めたらよいのか、劇やダンスや合奏は、脚本や題名がきまればすぐにもとりかかれるが、これはそうはいかない。これから発表の内容をまとめなければならないのである。とにかく工場見学のあらすじだけ書いていけば、あとは子どもたちと話し合いながら考えていけばよいだろうと考えた。子どもたちの中には、先生からどんな役柄がついてくるのかというところで期待していたらしく、「先生ぼくは、何をやる役ですか。」「わたしは、何と言えよいのですか。」と教師から与えられる役を待っていたのである。そこで私は、子どもの考えを変えることの必要性を感じ、学習発表会のあり方について指導してやった。その結果子どもたちは、新しいものを自分たちで創造していく喜びを知ったらしく、とたんに活気づいてきたのである。そして、やる気じゅう分の子どもたちと話し合っているうちに工場見学の発表のいくつかの場面がきまり、場面毎の発表者がきまった。発表する内容の説明は、発表者が自分で考えること、発表の場面については、絵(ペープサート)だけでは、おもしろくないから、工作でもやってみようということに決定した。ストーブはダンボール、ベルトコンベアは、いくつものダンボールで作ったストーブをみんなで動かそうということになった。オーバーヘッドコンベアは、つなと滑車を使って天じょうを動くようにしよう等、子どもたちが、それぞれの知恵をはたらかせていった。子どもならではの着想がいっぱいであった。教師がおとなの頭で考えるのよりはるかにすばらしい二年生らしい発表になった。

今までは、当日が終わると何となくがっかりしたような学習発表会だったが、当日に至るまでの子どもの活躍を思い出すと、終わった後まで何か充実感のようなものが残っているのである。先生方や父母からも工場見学のようにすがよくわかってとても楽しかった。と好評だった。

例(二) 子どもを信じた研究授業

いくつになっても、何度経験しても研究授業というものは、何となくおっくうなものである。いくら準備万端、これでよいと思って授業にのぞんでも、相手が人間(子ども)であるだけにむずかしく予想がはずれ、あわてることがしばしばある。しかし、10月の社会科の研究授業の時は、授業の日が近づいても、なぜか気軽な気持ちでいられた。何とかやっけてのける子どもたちだから、いつもの通りにやればよいという子どもに対する信頼があったのだろうと思う。授業のでき、不できについては、いろいろあったと思うが、それは別として、全員がよく学習に参加していたことについては、好評だったように思う。どんな難問、課題をぶつけても必ず何らかの反応がかえってくる。楽しく活気のあるクラスだが、裏がえして言えば少しうるさ過ぎる、落着きのないクラスと思われるかも知れない。これが、今の私のクラスなのである。

例(三) 自分たちの事は自分たちで解決することをねらった座席交換

「三学期は好きな人と並ばせて」という子どもたちの意見をとりあげてやることにした。しかし、何の手だてもなしに、現実にはそう、うまくいくはずがない。かならず満足しない子どもが出てくることは、間違いないのである。それを予想して、あらかじめ並びたい人の第1、第2、第3希望までを書かせ事前にまとめて用意しておいた。それによるとやはり問題が残るそうなのである。

そして当日、「自分の好きな人と並んでごらん。しかし、全員が自分の好きな人と並べて、みんながよかったというのであれば、好きな人と並んだということにはならないね。時間は、いくらかかってもいいから、みんなで話し合ってやってごらん。」と子どもたちにまかせ、あとは、リーダーのS君にバトンタッチした。間もなく、ほとんどが第1希望の友だちと並べるというので、とび上がって喜んでいる。事前にまとめておいた通りであった。予想どおり、残る6人が困り顔できょろきょろしている。さあ、ほかの子どもたちも心配になってきた。そのうち2人が、こそこそ話したかと思うと、「2人で並びたい。」と言ってきた。さて残るは、あと4人、S君も大変である。それぞれ4人の友だちの長所を宣伝してやったり涙ぐましい努力をしているのに、絶対にいやだという。理由は、その4人がいやなのではなく、第1希望の人と並べないからいやだというのである。そこでE君が名案を出した。「一番好きな人と並べなくても、好きな人のグループにはいれば、給食の時、グループ学習の時、何でも一緒に出来るから、そういうのはどうですか。」というのである。とたんに、4人ともM君の案で納得し円満解決ということになったのであるが、ここがチャンスとばかりに指導を加えたのである。何でも自分の思いどおりになるとは限らない。気の合わない人とでも、どうしたら仲よくやっていけるかという勉強も大切なのである。きょうは、その大切な勉強をしたのだということ。

例(四) かけざん九九の電話

三学期が始まって二週目のある日、おもしろい電話があったということ事務員さんから、後で連絡を受けた。その電話というのは、T君が、家に帰ってから、かけざん九九をいっしょうけんめい唱えたら、できるようになったので、受持ちの先生に聞いてもらいたいということで事務員さんが、かわりに聞いてやるからやっごらんというのと、大きな声で5の段の九九をじょうずに唱えたというのである。遅進児のT君を知っている事務員さんは、「先生、とってもじょうずにできましたよ。ほんとにかわいいですね。」と話してくれた。T君にとって電話をしてまで受持ちに早く聞いてもらいたいほど、かけざん九九を唱えられたことが、よほど嬉しかったのだろう。その熱心な電話のことも賞められ、はげみになったとみえて、それからは、他の子が簡単に覚えられるのをT君は、その何倍もの努力をした。そして、とうとうみんなと同じに覚えてしまった。「みんなが覚える時、がんばれば覚えれる力があるよ。」と口ぐせのように言う言葉の意味を忘れなかったのであろう。

例(五) お年玉で買った理科実験用具

「先生には、ヒ、ミ、ツ」と言いながら何人かがささやき合っているのを、また私に対し、いたずらでもしたのだろうと思っていた。理科の授業(くもと日ざし)が始まったとたん、さっきささやき合

っていた子どもたちがやってきた。「先生、みんなで実験やろうと思って買ってきたんです。きょうは、これで実験をやしましょう。」ヒミツというのは、そのガラス板と綿だったのである。よく聞いてみると、みんなが早く実験したいというので、自分たちのお年玉から出し合って買ってきたというわけなのである。「受持ちがのんびりしていると、子どもたちが、しっかりしてくるものらしいですね」と同学年の先生と笑ってはみたものの、どうにも子どもたちに一本やられたという感じ、子どもに、教えられた感じであった。

例(六) 子どもに教わった児童指導のコツ

私のクラスの子は、実によくけんかをする。休み時間のけんかは、教室まで持ちこまないようにしよう。という約束など時々忘れてしまう。M君もそのひとりである。ある時、M君がドッジボールをやっていて仲間はずれにされたといってきたので、どうしてそうされたのか、関係の子どもたちを呼んで聞いてみたことがあった。相変わらずどっちもどっちなので、別に叱ることもなく仲よく遊ぶように言って話は、すんだのだが……

そばで、その話を聞いていたT子が、私の耳元に口をよせ、「先生、あんなふうには聞かない方がいいよ。いちいち、そんな事を先生にゆうんだからって、よけいM君が、みんなに仲間はずれにされちゃうんだから。」とM君の友人関係を心配して言うのである。「そうだったね。先生が考えなしだった。みんなにまかせておけば、何とか解決するのね。」と言ったが、T子に教えられて、ハッとしたのである。その後、M君も、いちいち言いにこなくなったし、けんかはしても、自分たちで解決しているようである。

以上は、二年間の実践の一例であるが、担任が変わろうと努力したことが、どのように児童に影響し、変化を与えたか、その傾向を知るべく、父母と児童を対象に調査を実施した。

先ず、父母を対象としては、入学前と変わったと思うところ、二年生になって変わったと思うところ、最近になって変わったと思うところなどについて、何でも自由に書ける自由欄と、選択して○印をつける欄とに分けて、父母に記入しやすいようにして調査してみた。

(自由欄に記入された事柄の一部)

- ・何でも自分でやるようになった。
- ・友だちがふえて、遠出をするので時折、親を心配させることがある。
- ・やる気がでてきた。
- ・自分勝手がなくなり、がまんすることができるようになった。
- ・思っていること、考えていることがはっきり言えるようになった。
- ・他人のことが考えられるようになった。
- ・朝ねぼうな子が早おきして「おかあちゃん行ってくるよ」と楽しく学校へ出かける
- ・いろいろくふうしてやることを覚えてきた。
- ・人をたよらなくなった。

(選択した○印の多かったもの)

- ・友だちと仲よく遊べるようになった。
- ・がんばろうとする気がでてきた。(やる気)
- ・自分のこと学級のことをよく話すようになった。
- ・はきはき話せるようになった。

次に、児童を対象として、担任の教育方針をどのように子どもがとらえているかを知るために、「どんな子がよい子だと思いますか」という問題を投げかけ、16問のうちいくつでも自由に○印をつけさせてみた。結果は次の通りである。

(○印の多かったもの)

- ・つらい事や苦しい事があっても最後までがんばる子
- ・友だちの話をよく聞いてやれる子
- ・友だちと助け合って勉強する子
- ・一つわかったらいくつでも考えようとする子

この表から見ると、どこの学級にでもあてはまる事柄のように思えるが、一年生の時の子どもを知っている私や親からみると、事例でのべたように、それなりの変化が感じられるのである。

<反省と今後の問題>

二年間受持ってきた子どもたちひとりひとりを、じゅうぶん伸ばしてやることは、できなかったとしても、自分からやる楽しさ、やろうという意欲は、ひとりひとりの胸の中に個人差はあったとしても多かれ少なかれ必ず実を結んでくれることと思う。

学校は、教えてもらうところではない、自分たちで学んでいくところなのだ。勉強は、教えてもらうものではない、自分で学んでいくものだという考え方を二年生なりに理解してくれたと思う。そして子どもたちは、これから先無限の可能性をもってどんどん伸びてくれるだろう。

しかし、自分自身は、これでよいと安心はできない。はずかしいことだけれど、20年の古いからを打ち破り切れない事実が、まだまだ子どもとの生活の中に時折、頭をもたげるのである。そして、いくら自分自身を変えるための努力をしているつもりでも毎日という慣れの中でどうしても主観的にもなりやすいものであるとつくづく感じさせられるのである。ときどき節をつくるように意識しての確かめというものがどうしても必要になってくる。この投稿もその節の一つとして考え、今後の努力を続けていきたい。

評

「児童の変容は教師の変容がない限り期待されない」この考え方が昨今の教育界の底流として大きく流れている。この実践記録は、「教師の変容」そのことを自分自身の課題とし、地道に学級経営に取り組んでいる。このような教師の実践は目立つことが少ない。他に目を向けることなく自分自身の変容に根気強く努力している姿は素晴らしいことである。誰れに認められなくても、担任されている子どもたちにとっては最高の幸福である。事例の一つ一つをみても、教師の変容がいかにか子どもの変容につながるかがわかる。子どもの創造性が増し、自主的に喜々として学習に取り組んでいる子どもたちの姿。そこには教師の変容の成果が明瞭に浮きぼりされている。

今後一そうの教師自身の変容を期待すると共に「教育とは子どもを変えることである」という確信にみちた姿勢で、実践と研究を続けられることを期待する。